



倭象考人撰

中



5
2766
2



門へ伊
2766
巻

酒井彪三編輯 大日本一統輿地分國圖 全部八十一枚

- 東海道 上枚 ○畿内 三枚 ○東山道 十三枚
- 北海道 十四枚 ○北陸道 五枚 ○山陰道 七枚
- 山陽道 八枚 ○南海道 六枚 ○西海道 九枚
- 琉球 三枚 ○大日本全圖 壹枚

茲圖を故人伊能先生全國測量基線より國境郡界及び山岳河渠道路の位置を正し且維新以來諸藩各縣の地圖を集め時習義塾に於て地學の先生を會し泰西の畫法を以て一國一葉の圖を舉げ支那に至るまで漏れなく編集せり之を能く其要領を得たり我邦地圖不在る未だ是より細精なるを見世の諸彦地理を明くせんと欲せん購求愛觀有人事を請ふ

東京日本橋區本町十軒店書林 江島喜兵衛敬白

能家芳人讀書中

竹憲玄玄一送稿男 藤屋重吉 参訂

松尾桃膏

松尾忠左衛門ハ侍覺上時後崇何某此近臣方より一年有る

里て加口を立いで活不より吟叟ニ遊學するより七年寛
 文の束つてと東武に下至礪川の水及修成備夫と有り月て功
 哉終家の比難髪一と風羅材といふ深川は店を結ぶ
 三つと毛蕪を挫く木む色あり世小舉く毛蕪店に
 稱に松尾重吉名店兼虫店初此名を宗房といひ後桃膏と
 改む又杖錢子乞佛材等名諸号あり至素より學識宏博
 察象飄逸古今小坐人系把所以亦里且禪名哉仏頂老
 洲は怪里馬法を渡河許六了好より尚財その種は改依



昔者鳥醉藏此物也久矣後授之於白河鳥黑
 鳥黑深秘而不置云往年予遊于奥羽而道經
 其地竊得就鄉人而摹之今茲縮圖以補蓼太氏
 蕉翁真之脱漏而已 儀伴閑人



之月

于

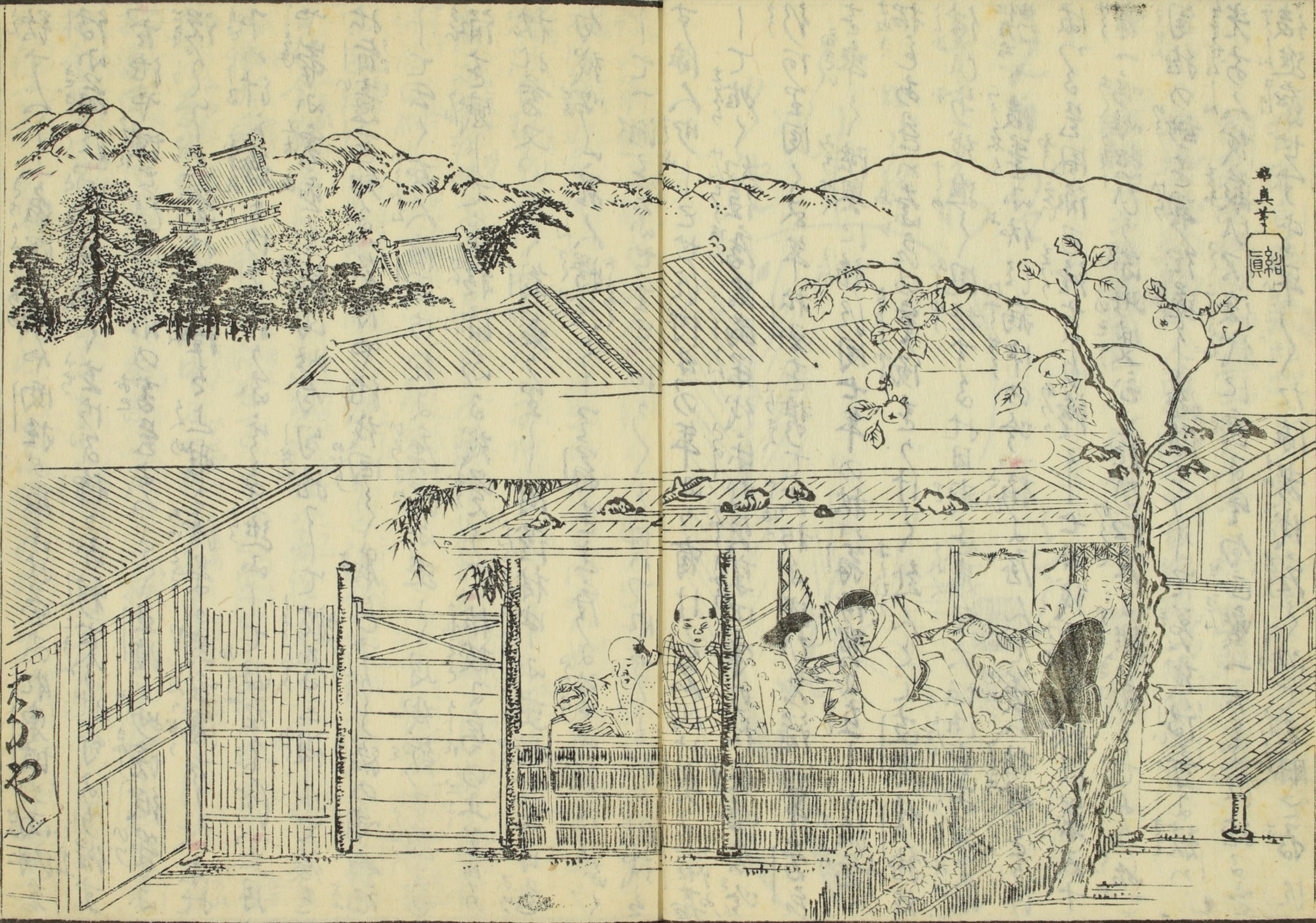
日

地



す保人少一己世は何の年小う有けん石山此奥又密居
 して始く幻位房忠齒深哉木む良摩江津の秋鹿崎忠吟
 仍何里回く又年松玉を携て大杉又遊びえ深二年首良
 を舉ぐ陸奥に旅戻同七年の秋の箱舟賀又在一が流急
 振毛あまの奈良の重傷をうけく赴んとて支考情独哉
 傳ひ歩哉進く風托する此日刺を患そ大坂由雲あそ屋
 船のちが後室小休は病中の吟一極よ屋んで爰は枯野をうけ
 ほつる是風詠の終ちり終る七日哉互く致は業又十
 有一啼吟悲ひう赤此更をたたび江左又龍舉してあり始
 自統の妙を筆紀遂く一能楷を一そ爰哉詩奇又終
 先お人哉兼ひ沢後代に垂る空句西爰一ちるは終るを
 後進察せしや平くた保考哉危く以て三昧と為は

眞羊
印



伊家奇人談

卷之中

三

秋ぞぐらゝ一雨深の雨や西掛がぬふれ東坡の西掛を
 引小瓶に田一板挿くまはる柳ふ彩を今此奇あり催す
 古池や煙とびはむ射水の書是すつとく玉燈の妙境紙筆ふ
 流ぐらゝ一茶坊玄鐘を上げずう浅茶の幽玄酒ちり一本此
 下の汁と給もけ久良くふさる夕進みて皮厚くは六月
 や帯小雲並く嵐山此句句結して濃厚之濃して後そ
 此旨意を知る名月や池我同く秋とすうう洛の嘯山記
 して云く友人雅園此記又廣沢小遊ぐ月我知る適山の
 縁を感して手替深ある哉受うと栢枝又鳥の止まらり
 秋此意又いとく翁若う里一時澄林中小交栢は一日是
 句我唱ふ友人愕然とて一羽をよるうふさふ哉袖もさく
 一七一酒をさふせ里と一何うくと何いつれちくも秋の風成と
 傳ふ翁感又栢く此句我ほたり風の字を山に留て北枝
 示は枝のそくいまと風此字の傳た海小ハ如す翁響を因く
 我たむむるそけみ也地よ子何り送り月く思家く一
 病小淋和味を忘るふえ孫中翁加別金城は移栢高学哉
 休庵の柳り表亭ふて一最舎舎何里一に主客意山海の珠
 味を役けらり煙は煙と後舎我物まんはは舞い
 はく今歌忘もてな一心迷此種は云煙は幽く一恨らくハ
 風種は枯ふ一我を涼ををよる人定めず或ハ種来一
 寂此爰成結ひ或は山中小一村客を凌ぐ独るに形る珠
 揚滋味あに風海の本意あらんやと栢してそ他は水枝書
 柳全寫此名歌哉おせると生霞海の海名屋りちは
 月てふり十六夜わつう小雲此始り宗院望の作古今

大成して天下後世は自らしく世傳中興の大祖と稱譽せらるるも
 宜方依りあ押す此豊是厚は御切を依疎まハ傳祖の形我伐至
 水ま之河ひ千幸弟弟一大家にのく名生我海度する
 等とやいそんま小等尚すん一
 支考りる各抄いさう
 子細あれは後とせらる

榎本其南

榎本の母才宜角之竹中東睦が子あり未ど源助と至一樹ハ神田
 於玉の池は後より儒我宮ハ秋生小字ひ匠を弟何某は
 我大護和尚虫を佐玄龍画我英一掃小僧つりて多能あり何の
 以よりう意つよのく冠首より晋其角ハ易燈の文一て室
 晋我と米弟が取る鑑する此字有り一名榎舎晋子師と雷
 桓子涉川とも画名萬子とり人里狂雷雲狂而崇六病瘡善哉
 又合唐等此諸号有り生性うるや杖逸一一人のりは
 了り酒を飲ぐ生確とる我石依る有り一或日ふ等信文
 此會美小仍合を人く晋思一ける我前生傍ら小碑中一仰ま
 居より云是一妙句はありこ起何ぐ重くいふ仰見銀河底と浦と
 冠里公室中此令小金掛あり月て銀掛有池ハ如何と戲言妙つと
 答く金掛ありつゝ涙玉をあまきぐぬ一と生所智大異法の類有り
 貞享中照陣町ハ居杖縁す破笠が池了嵐香とた小回居せり
 と載るも此法有り或方より一巻の点えを巻に収まき足僅ハ
 返して同く世書何中り小初んちり我附巻我弟するに及も
 連中ノ先祭又後すん一と仗是能なく書を交たり扱点料も
 返してんやとのみ答く料ハ不償又收並ふ王と返け里一もい
 をり一今時人その徳もたのくそ力も亦くて四了古人也酒
 落し撥一風種我鬻了甲乙を立ると同日の夜あふんや昔

後改
姓室

生言息すくち記を連申くとちりまをど欠値を人中まうらうハ
 三味線の糸より細記能階へてんころくといふまをうし記連申
 匹一三弦此糸より細又まといふてんころといふまをまうしき
 といまをど又清誓ちるえ深北百共神明町へ移居はは此れよりか
 まりまが庚申の夜家守とに編しと生而残立返して個度ちんごま
 荷ふ作り匂子く記おしと一言在ぬ唱と唱り夜申ぬ音申度へ
 俄一宅替しり白生懸屋すと思ふ屋し後堂場町へ移居残
 浩ぶ歌舞子り家近隣小徳味家の家りり生時の口號梅が希やこ
 ちる小筋生懸ちる世句何きの集りも又人ぬどもさうら人の備す
 西方り家永に逢二月春暖坐閑がの吟とて言此曉室し記ま
 しくはとるく痛小部し少ふせむして返は世句一生此終吟
 三つ成小たり 武深ままぬく種まうといふハ何やまをまをりを後うけ子成傷む白の端
 何ハハリやんてうしと初め世子持傳へし羊面屋人の市と冠王公より
 編る所の文字出まはは是成琴形の市小取附を物有りあり
 岩小秘し並り武時門人ちみぐり戯言小望み出し目成終く
 已う家く振記指活の胡麻変此申へ盛くく言おしあり剛何ん
 ちく喰りて持ぬり種強くつ人のあま成聲が喜慶小酒持を
 そのつねし言教ま目録目作志小像を授し出し生そし
 藍纏つちく剛の中へ治し並りて武女小記まうし言説といふ
 屋一一事の作すく氣成以くまは生そめの跡を而争す
 是小懸ずを派北権うて高尚者すゆも常小軟休せりとを
 水や何小をばる川苔の味胆星や横けとぬぬ山りら一こ
 ろ小裕又奈協や黒本ら全一五照の面おさげや時多秋れ重
 屋上の板を誰まうらうしと板や言も舞食小字はの山言此

生言息すくち記を連申くとちりまをど欠値を人中まうらうハ
 三味線の糸より細記能階へてんころくといふまをうし記連申
 匹一三弦此糸より細又まといふてんころといふまをまうしき
 といまをど又清誓ちるえ深北百共神明町へ移居はは此れよりか
 まりまが庚申の夜家守とに編しと生而残立返して個度ちんごま
 荷ふ作り匂子く記おしと一言在ぬ唱と唱り夜申ぬ音申度へ
 俄一宅替しり白生懸屋すと思ふ屋し後堂場町へ移居残
 浩ぶ歌舞子り家近隣小徳味家の家りり生時の口號梅が希やこ
 ちる小筋生懸ちる世句何きの集りも又人ぬどもさうら人の備す
 西方り家永に逢二月春暖坐閑がの吟とて言此曉室し記ま
 しくはとるく痛小部し少ふせむして返は世句一生此終吟
 三つ成小たり 武深ままぬく種まうといふハ何やまをまをりを後うけ子成傷む白の端
 何ハハリやんてうしと初め世子持傳へし羊面屋人の市と冠王公より
 編る所の文字出まはは是成琴形の市小取附を物有りあり
 岩小秘し並り武時門人ちみぐり戯言小望み出し目成終く
 已う家く振記指活の胡麻変此申へ盛くく言おしあり剛何ん
 ちく喰りて持ぬり種強くつ人のあま成聲が喜慶小酒持を
 そのつねし言教ま目録目作志小像を授し出し生そし
 藍纏つちく剛の中へ治し並りて武女小記まうし言説といふ
 屋一一事の作すく氣成以くまは生そめの跡を而争す
 是小懸ずを派北権うて高尚者すゆも常小軟休せりとを
 水や何小をばる川苔の味胆星や横けとぬぬ山りら一こ
 ろ小裕又奈協や黒本ら全一五照の面おさげや時多秋れ重
 屋上の板を誰まうらうしと板や言も舞食小字はの山言此

日や船院どの顔れいろ一應まれくおぐらある人々の塊はれ
 正変を以てするもの文を以てはしはしおす後ろふ眼前風標
 人西く云はる能はず一云雨や家我回く鴨なく後乗又が如
 文涼よくど男お生れりる雄枝倫を一稲妻や竹のふふふ
 為乙固ぐ洋の什是よ出るに似たり一舌くれて猪れ齒はり家の
 月或洋すく今令此子後夏於詩何減李王と流宋一盛
 子て歩るも文婦く赤名月や夏はく人小松の軽冬來てら
 鹿野小はる鳥り奈生縦横句在る月屋一史能満の松蕉
 翁と此子也一朝不可論尽去る依を後人何るひの思くらく晋子
 調異師翁と殊不知難而合者有り蓋一史考許六の集後編
 多く空作思を焦一奇哉索吐とい人とも意解れ條體晋子
 が自放するに及ばざるもや遠一

服部嵐雲 附烈女

服部嵐雲の流別小坂並村小右生に幼名久る助の洞を居る流一松於
 久未助を此邊の事とあり長里と東武とお杉庄隈西ふ小竹く何りて
 いふり一因名お人あり一長里と東武とお杉庄隈西ふ小竹く何りて
 又井よおお公も勅とる一其流の産を世といひりり一年君
 侯の信して我第お飯里井の端より去り足濯んとするに年子
 有り此雲り妾の降来る代尺く一武士此是で米とく妾く赤と
 戲生口すさみ一素より業成難れ本小把く山色を赤まん
 こと志一止ぐ一裁種ちりて一居宅を退の日常細衣類
 雅意等よいすると一素色手に携へば其信はと一色唯一
 風雲とて小深ひ出いつり一蕉つ一梅ぐ能名を流助といふ後
 嵐雲といくる一嵐此庭の言をてりと思ひ寄ける悪さ今史
 改んもおかほ一と笑みる度く有り妻れ名を列といふと

正橋り之雲のくもも櫃の秋

海

女考九句

鶯十六屯廿

其角

半面美必

沉香
亭裡

合

木乃くふ徳のりかむと橋東

半面美必

百花嬌語

翠蓋

隊玉簪

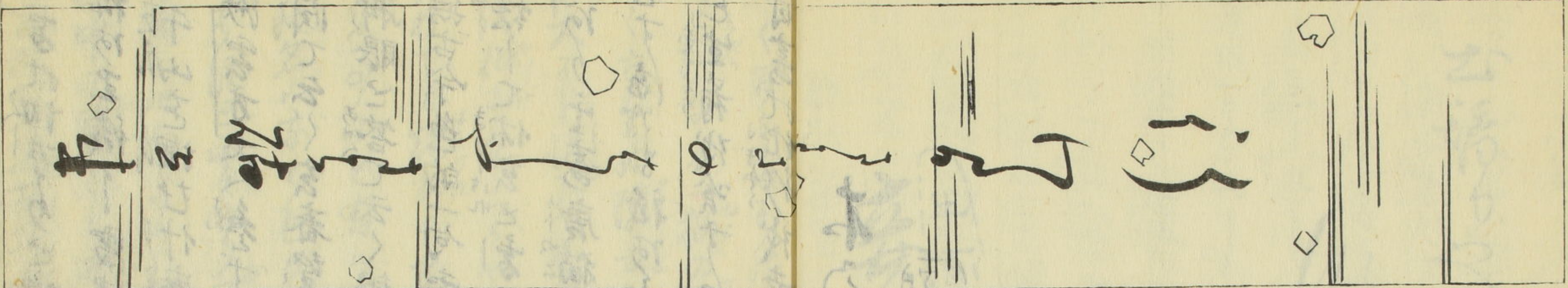
探荷

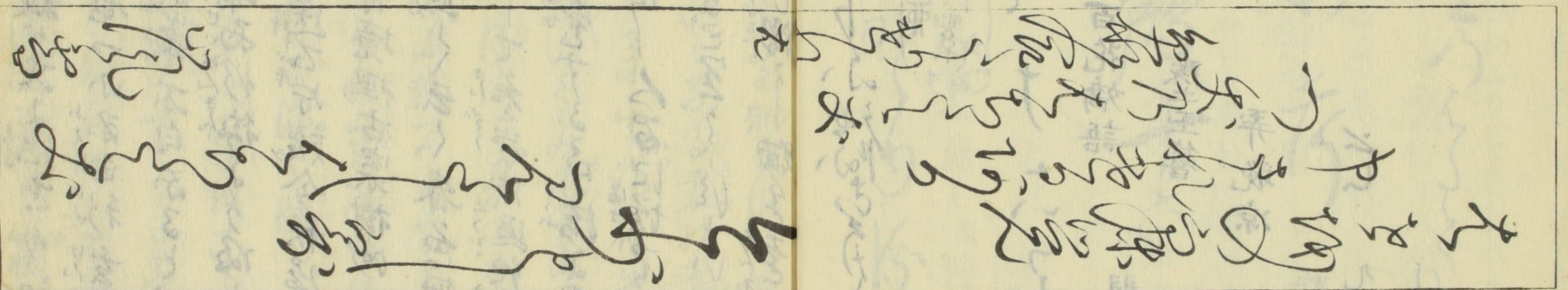
弄晚涼

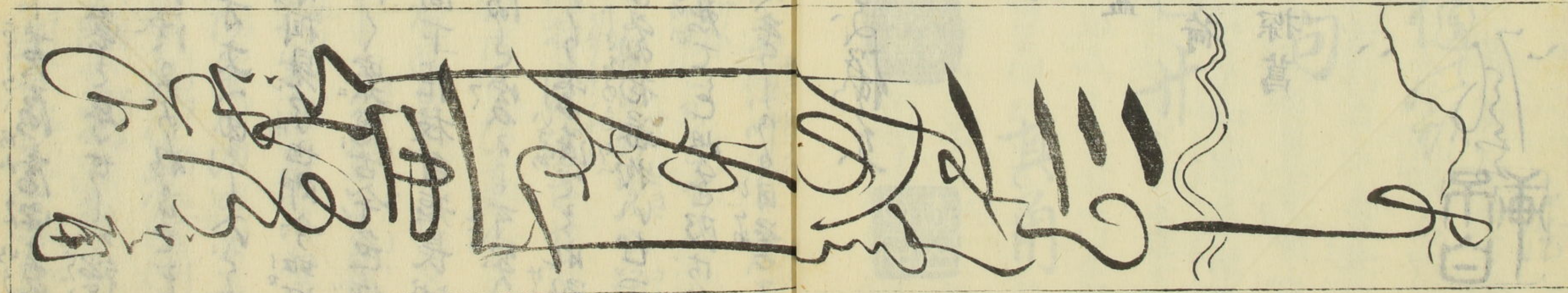
探葛

九

風
白


 心


 心


 心

伊家奇人談

卷之中

九

嵐方此切なりと神寂が文に記さる初に「英落唐室」
 此神河里後「雪中庵」小「白杉玄峯」
 雪千山を埋む「什麼孤峯」
 に「澗雲」才丈へ「参す」
 沙岡て云く「玄春望」
 行脚眼に答て云く「觀音境裡」
 生無古今色の一句「寄進」
 を讀んで休まざる「寄祥」
 後阿りの「生妻唐猫」
 聖す「海」も「神阿る」
 小と生看「我喰す」
 或日書「此」
 束く「寄」
 小と切「なり」
 悪く「寄」
 妻大「了」
 分我「和」
 築れて「と」
 時若「る」
 分此「名」
 及た「は」
 此派「と」
 集中「小」
 不言「祝賀」

伊家奇人談

卷之中

十一

句雅一此什温厚和平实小平安の氣を添う家君不^レ少や
 手い^レる^レと^レ筆^レ此^レ欄^レ足^レ見^レ其^レ莫^レ逆^レ世^レ活^レ一^レ亦^レ紀^レ身^レの^レ瘦^レ又^レけ^レり^レ作^レ
 里^レ獨^レ活^レ意^レの^レ風^レり^レく^レ来^レて^レ喧^レき^レ酒^レ此^レ泡^レ竹^レの子^レや^レ思^レ此^レ園^レと^レ
 此^レの^レ養^レ此^レ梅^レ一^レ輪^レ一^レ王^レ人^レ祗^レの^レ陵^レは^レ沃^レ海^レの^レふ^レり^レと^レも^レ若^レ
 り^レ亦^レ初^レ秋^レ此^レ人^レ勤^レき^レぬ^レ纏^レす^レと^レれ^レ皆^レ以^レく^レ足^レ見^レ其^レ正^レ風^レの^レ莫^レ曉^レ
 年^レ山^レ竹^レ井^レ戸^レ小^レ宅^レを^レ求^レく^レ久^レく^レ住^レせ^レり^レ時^レ一^レ室^レ永^レ年^レ十^レ月^レ
 及^レ以^レ家^レ又^レ十^レ有^レ四^レ辞^レ世^レ一^レ禁^レち^レ依^レ咄^レ一^レ禁^レち^レる^レ風^レ此^レ上^レ當^レ又^レ用^レ
 此^レの^レ鳥^レ市^レの^レ人^レ園^レ竹^レ又^レ授^レけ^レ園^レ竹^レ是^レ我^レ吏^レ登^レ又^レ傳^レふ^レ後^レ世^レ此^レの^レ下^レ
 風^レ了^レ浴^レす^レる^レ若^レ東^レ於^レ多^レ一^レ主^レ徳^レす^レと^レ大^レ亦^レは^レ也^レ

向井玄来

向井平次^ハ宿^ハ前^ハの^レ抱^レ抄^レ此^レ人^レ幼^レあり^レ名^レ又^レ後^レ洛^レ陽^レ二^レ居^レ此^レ
 生^レ年^レ舊^レ門^レ亦^レ入^レく^レ玄^レ来^レと^レ能^レ名^レす^レ其^レ風^レ格^レ書^レ中^レと^レ並^レそ^レ先^レ
 輩^レ不^レ及^レ一^レ蓋^レ一^レ尚^レ村^レ莫^レ以^レ物^レの^レ魁^レあり^レ一^レ芽^レ形^レ山^レ情^レと^レあ^レり^レ
 小^レ意^レ矣^レと^レて^レ執^レとも^レ不^レえ^レて^レ細^レう^レ内^レ男^レ々^レ一^レ許^レ叩^レ此^レ来^レぬ^レ君^レと^レ家^レ
 れ^レを^レ撞^レち^レり^レ一^レ玉^レ掘^レの^レ奥^レ奈^レつ^レり^レや^レ秋^レの^レ聲^レ尾^レ尾^レの^レを^レえ^レぶ^レ記^レ
 海^レ嵐^レ々^レ亦^レ荒^レ磯^レや^レ走^レ王^レ別^レ多^レる^レ友^レ子^レを^レ妙^レ符^レ死^レして^レ後^レ抄^レ或^レ
 作^レく^レ以^レて^レ其^レ流^レ水^レ便^レり^レ生^レ性^レ其^レ涼^レ切^レなる^レ皆^レ人^レの^レ知^レる^レ所^レなり^レ
 其^レ舎^レを^レ居^レ材^レと^レも^レく^レ自^レ紀^レ風^レ俗^レ又^レ其^レ舎^レを^レ碑^レ古^レ書^レして^レ回^レく^レ
 一^レ我家^レ此^レ能^レ湯^レに^レ遊^レぶ^レ屋^レ一^レ世^レの^レ理^レ屈^レを^レい^レふ^レり^レく^レは^レは^レ
 一^レ拍^レ夕^レ々^レと^レく^レ精^レを^レ哉^レ思^レふ^レ一^レ魚^レを^レ哉^レ忌^レふ^レい^レあ^レる^レは^レ
 一^レ迷^レふ^レ一^レ灰^レ吹^レを^レす^レ内^レ屋^レ一^レ烟^レ草^レを^レ嫌^レふ^レふ^レる^レ所^レな^レす^レ
 一^レ隣^レの^レ居^レ借^レ哉^レは^レ一^レ火^レ此^レ用^レん^レ一^レい^レあ^レる^レは^レは^レ
 い^レと^レ風^レ涼^レ一^レて^レ可^レ矣^レ一^レ支^レ考^レが^レ後^レ日^レ記^レの^レい^レふ^レ玄^レ来^レ亦^レ烟^レ管^レ哉^レ
 掃^レ除^レす^レる^レの^レ癖^レ何^レり^レ又^レ此^レを^レ妙^レふ^レ隣^レ若^レ居^レ借^レとい^レふ^レり^レあ^レる^レ

是も此屋敷に此と平といへる者多し食ふに成送るる所を
 里に時り一室永元年九月死に成根の許にその傑を作
 曰く略多し全一時あり流し居す弓矢成抄て十五連と成
 たり二十五年先此に合く三十年末大徳士何の法ありり
 先妙慈符又思く風種此名ふ言ふり京沙小かあしく諸
 子の既り一存す南あ若衆を押し東也此風成護す若衆
 此時正風作の眼を成地湖抄水まは里りり五月雨りりや積葉
 の撰を蒙く不易流りの巻成かち後積の彩風と成てと成
 函云若細みそ忘まはし本指の地りも流しぬ時あり赤子祝
 や雲雀の十文字を申りり又何水の仲秋りや若衆や安
 小も獨り月此客に詠して先沙抄年を響しし月賞歌の才一
 古々の乗送に極里にめ成く一代の乗送を一首句持る人
 片く稱あはるる一此を成とい成り一教句に及りり二十餘年
 此形水の決つり里暖味若居材舎よ沙をむりり石山の幻燈
 唐よ考を付ふんざり流くを成てを難波の愛成て成
 經を解成義仲奇此蘇も扇衣小湖流を携ふ成後
 博茂堅く守里流成ちらけ初人を投く越の流成り
 智く有波成波の虫を選り一崎此卯七成助く渡を成
 正し我大形り力成よせく文選序者れ一人進み病
 床小却てと三夜句他の虫を成り何ある蕉つ滅亡成
 月月りや何里りん去年の冬に成紙の院家成り玉ひぬ
 今年成文若文若年す秋九月この郎成くも成記足と
 ぎ此思ひを成せく人成揚成影りるるや下果又支考り成
 材先生の揚奇何り成り一略成

伊藤家言

卷之中

十一

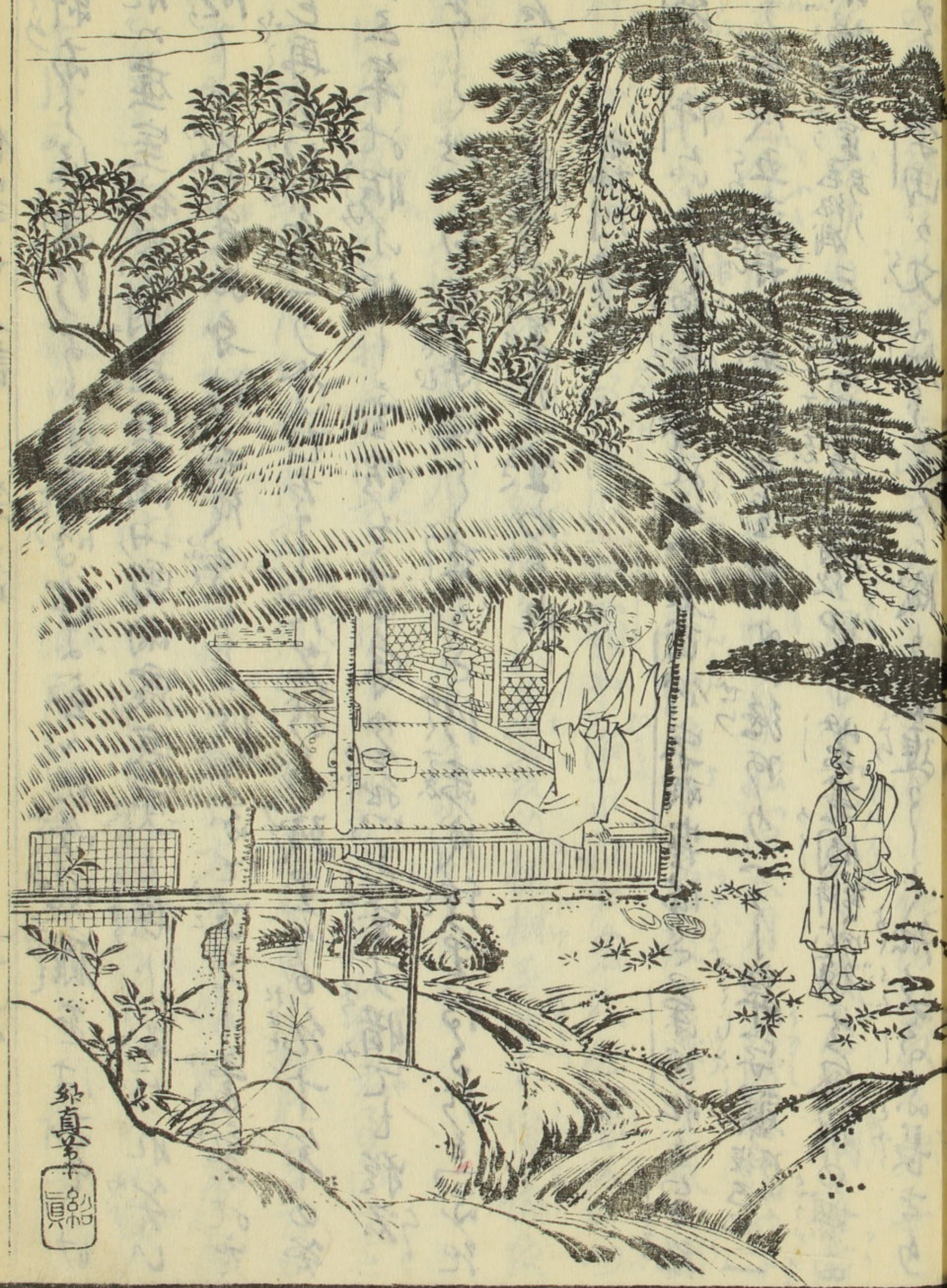
仿史草

僧文子之先代々尾陽大山の寺に在り知り学成好く倭
 漢を究む躬を以て母を侍り孝心たるを才とて生る所を
 は赤坂ゆりゆり生るを魁せ嘗て右の指小痴つけ刀此柄持て雜
 しと語り壯年武成辞して福を家とて生る所の口號多年夏屋
 一蠅牛化做蛄蚰得自由火宅最惶涎沫不偶尋法雨入林紅白の深風
 了きゆる浅雲れ有る子以て法華経を讀誦するより他を
 しとつふ何ぞははるる意門を遊んで時々興成備ふす我るそ
 波瀾此述し福并く家一啄木を中枯木成栞はるる名中醒靈
 色少く假此世の福を懐く家自明く振向ぐと此世をうき
 立く衆の象もちり重り隨言句をその作を可憐室水
 元年二月廿二日一て此世成る家名人去來深成作く
 因く今茲如月來此日月ハ竹庭に殘る物く福沙家傳り
 里ぬと湖南の西秀が許より知は生る白小窪ふはり里潤
 止久し孫奴津久くそけ人若むし我思ふは尾張の西の
 生れ在り山侯に仕りく勇猛其名も有しこりや一日若志
 一人を假し空欄し君父の家成思ひ出返の傍小懸たし
 きり雲深引替らぬる中果洛志史邦又ゆり里五兩亭
 に仮寐し先少不見く神らぬしあり二尋此故世の中
 小臥を折し並くは百の火燵の上と面成はし一向て今舎に
 同く此人を鉄に先少は云ふけ僧是道に進み学はる
 人若よまをんる月成紙屋りしと此とお人り去下地
 の艶起るる羨むし一結も性善み学ぶる成出たすは
 感有りて吟道人あやしく傳す若とけるあ忘るる若

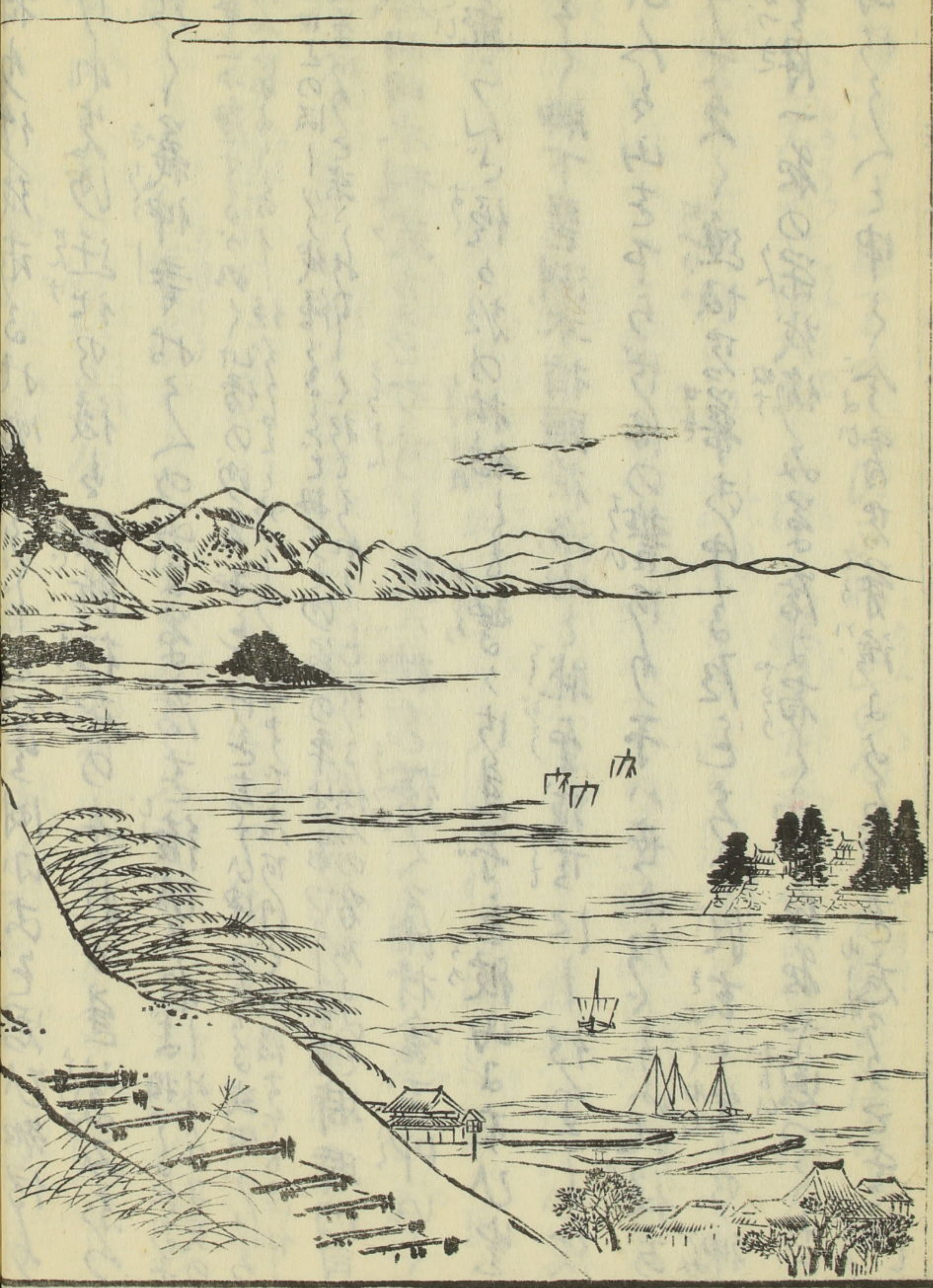
非家奇人談

卷之中

十三



録
 貞
 十
 三
 頁



斜あつに文りすく小雷鳴地よ云々此吹風廊をはあちけ
 此ハ虚室欲穿閑是空満山雷雨震寒更と興トおられ笑い
 順一てあまぬ身妙と我啼々々はうふと嘆え一雪染れ
 已再を移免ぐり今むち一此名妙み残里々白九十年の笑
 三年此恨不化一雪恨る百年雪然を生す惜ても粒
 ちく此一句成手向く来くと涙成修里信る妙と云紀
 名まきく喜や三年の生ゆりれ

森川伴六

森川伴六は江戸彦城此士一名百仲字羽宮師と柔阿松と自稱
 一居我五老并と号にふき并小四絶あり一草字藤原二
 小揚揮豆毛絨襦ニ雲花墨波瀾甲一紫芝岡紫芝岡自号風雅の癖
 るるの李田が文は知る人と成り敏達一と能くふ長ざり

又画成解す意存も画と云く沙と云く一能得ハ表と才子と
 素はと出けり生殺句すと興せり一本箱に成屋記桐老若
 芽うか今カ匠の喜れ坊場や帆ヶ舟船口日月の波浪さ浪や子
 規一竿と死装束や古用干一着純此万を招致感嘆り哉一欄
 杆小堂るや業此乾法沙一初霜や治承江戸名人公嫁入のつ
 色るたり津敷、此沙翁歿後そ此送愛の様樹を伐く肯像成
 刻み是成大津の替月屋一繕る生又小いそく

此床敷表せり持ちの法せり此一曰お友存の拙者よりいすこ
 す此と云け在の像も皮延引け夜翁も手小柄れら且云又
 堂并此古本とて刻みすひらせん兼て大方も像刻り夜翁
 フダしてても初葉ぬく叶むぐくく人粒又強此意中小似
 十月三日 表の後像一添屋記業と云一 伴六

智月尼様

生恩遇の深恩を忘まげりる事初れ如く惜むるも晩年癩瘡
 重くして人小面する事あり適道我道人と召取来る人あり
 とも屏風を志記すく違ふと成許は後一年金塔の築子い
 と川て對面せん事成れむむいりて屏風成信んやと病床
 迎へて飲酒お祀よぶ事教刻唐け屋く臭氣芳くたりし
 子ちりく事成て碑破ちく破りて後室合らるは是バ病何ん
 事不^ま思^ま念^ま子^ま小^ま隱^ま多^まも一度^ま茶^ま子^ま小^まお^ま又^まえ^まる^ま露^ま人^ま信^まさ^ま
 風雅^まと^ま成^まて^まの^ま大^ま丈^ま夫^まち^まら^まり^まと^ま財^ま人^ま降^まし^ま合^ま体^まと^まも^ま區^ま他^ま又^ま逢^ま
 小^ま死^ま後^ま後^ま焉^まの^ま獨^まり^ま一時^ま打^ま破^ま屎^ま糞^ま壺^ま芬^まや^ま臭^ま氣^ま供^ま梵^ま天^ま下^ま後^ま
 死^まぬ^まる^ま事^まと^ま思^まひ^まし^まし^まも^ま死^まぬ^まを^ま屎^ま上^ま手^まち^まり^ま此^ま子^ま終^ま身^ま
 已^まま^まが^ま成^ま成^ま句^ま後^まして^ま化^まを^ま皆^ま蘭^ま物^まと^ま思^まひ^まり^まあり^ま平生^ま毎^まの^ま
 後^ま中^ま一^ま下^ま弦^まを^ま記^まく^ま入^まる^まの^ま我^まれ^まみ^ま方^ま里^まと^ま言^まふ^ま事^まり^ま彭^ま老^ま後^ま
 まで^ま膚^ま摸^まち^ま目^ま逃^まり^まけ^まる^まの^ま能^ま家^ま此^ま一^ま奇^ま物^まと^ま稱^ます^まべ^ま

東宮内支考

支考を若深お此人は^ま一^ま支^ま様^ま等^ま小^ま入^まく^ま結^ま花^ま全^まとい^まし^まり^ま一^ま支^ま
 冠^まの^ま法^まを^ま吹^ま毛^ま海^ま也^ま春^ま三^ま月^ま彭^ま揚^ま壯^ま丹^ま花^ま下^ま風^まとい^まし^まる^ま獨^ま我^ま作^ま
 宗^まつ^ま此^ま子^ま信^まり^ま未^ま終^まも^ま安^まね^まも^まる^ま東^ま於^ま武^ま寺^まの^ま大^ま舍^ま小^ま環^ま嚴^ま最^ま
 溝^ま多^まハ^まケ^ま條^まの^ま前^ま林^ま成^ま能^ま同^まに^まあり^ま法^ま着^ま生^まを^ま妒^まみ^ま違^まり^ま
 襪^ま襪^まを^ま控^まきた^ま里^まと^まや^ま嘗^まて^ま皆^ま陽^ま山^ま田^まよ^ま身^ま成^ま置^まり^まが^ま何^まと^ま
 風^ま衣^まに^ま親^まみ^ま交^まる^ま時^まり^ま涼^ま卷^まその^ま方^ま成^ま惜^ま之^ま能^ま惜^まを^ま勤^まく^ま意^まつ^ま
 入^まり^まむ^ま功^ま成^まく^ま阪^ま口^ます^まとい^まし^ま見^ま龍^まとい^まし^ま醫^ま又^ま隱^まる^まは^ま名^ま白^ま程^ま遠^ま
 二^まと^ま後^ま又^ま没^まる^ま事^まり^まて^ま及^まの^まお^まと^まる^ま事^ま三^ま次^まの^ま果^ま小^まと^まる^ま成^ま
 支^ま考^ま花^ま仙^ま人^ま名^ま稱^まあり^ま坊^ま号^ま成^ま東^ま華^ま西^ま華^まと^ま唱^まる^まハ^ま口^ま一^ま道^ま遠^ま

十條の僧より、此の在るに、盤子と呼ぶ家、在るときは、獅子老
 人との小支考といふるに、舊名ありて、字二教に、涉王、乃又文成
 以く句及す、著す、而十海、古今、抄、皆、ほく、あると、確、福、あり、を、發
 句、又、針、て、ハ、亦、与、汗、ハ、魯、衛、之、政、身、行、枝、ハ、聊、ヤ、加、よ、ひ、て、梅、の、意、
 灌、仏、ヤ、因、出、之、紀、る、中、小、古、は、あり、惟、子、の、形、之、安、一、淺、五、百、一、牛、呵、
 声、小、曉、之、月、夕、ハ、ハ、惠、ん、ち、又、存、之、世、で、綱、代、守、は、し、め、け、子、僧、形、
 残、誓、す、傍、律、を、古、て、居、る、里、り、の、路、一、衣、汗、を、解、の、公、起、る、時、
 聖、道、持、禁、小、便、す、れ、が、也、舍利、ハ、亦、申、法、肉、食、亦、之、の、杖、後、も、有、り、を、感、
 法、所、い、す、一、多、く、懷、陸、屋、を、ハ、東、世、ハ、ち、り、凡、牛、と、ある、と、一、と
 い、つ、に、答、へ、平、亦、有、る、合、点、を、ヤ、招、寐、夕、す、み、一、年、尾、の、巴、
 靜、と、伴、歩、一、は、り、る、こ、て、素、名、此、後、一、舟、一、乘、り、り、ぬ、は、一、も、去、
 此、尖、を、去、ぬ、とい、ふ、と、額、を、ら、く、此、石、字、津、美、ハ、堂、殿、茶、小、多、と、り、
 雲、雀、の、妙、唱、を、る、か、り、一、笑、え、く、洋、く、た、る、海、上、と、も、書、き、を、あ、
 ぬ、信、如、き、信、ヤ、も、及、ぶ、ぬ、風、宗、古、り、靜、村、此、密、中、杖、叩、い、く、
 一、句、何、る、屋、一、ヤ、と、答、ふ、答、て、曰、く、古、人、も、亦、亦、違、て、を、嘔、す、る、
 とい、つ、り、初、十、か、ち、る、交、ゆ、く、ハ、句、按、此、卷、す、所、揚、ハ、何、り、
 今、亦、何、才、ハ、亦、と、も、有、り、し、る、時、を、お、の、長、健、一、海、す、ん、
 一、寧、亦、送、我、信、一、人、の、推、中、を、お、あり、と、靜、と、感、ト、て、は、を、
 一、門、た、里、と、り、中、候、年、信、と、應、答、く、返、り、一、通、り、一、五、年、後、後、
 一、時、小、尚、川、一、今、風、を、慕、ふ、者、多、く、後、世、連、綿、一、て、は、若、
 一、派、我、唱、信、と、是、す、と、此、老、が、信、ち、と、す、ヤ、

曲翠 附 幻 狂 老人

曲翠 賦、と、曲、ハ、江、河、猿、折、の、ま、う、一、く、馬、指、堂、と、号、に、切、起、り、煮、つ、
 小、遊、ぐ、を、老、手、と、稱、せ、り、る、一、念、入、て、を、り、る、卷、む、山、茶、く、思、ふ、

又く布一疋をよぬ村よりよんでおゆ紀或旅宿に跡く布
 城おし着物と日月継ぐぬべ残を借ふよんといふは女
 いそ紀継ぎきせぬ村登路起出り白が立席く云く終ま
 物着意一室衣うすれよと垢附くる古物を着う人終
 又す一て去にりり又又美濃國經此村あり旅宿あり宿るま
 逆次妻を運くいとと度家の跡を収め小社河ま衣柳
 小掛並りり下めおとく超く思ふに客宿は屋お好て衣柳
 此振袖と日月失り柳の彼村の空へ係よまよと定ぬ
 若くま字く怪物村人着物する小器此若く何は旅宿と何
 らんと去るん此くく存居里るに果してま西も存く答
 りるは今路早く立出く係は種風身小のく凌ぐと軍机
 立席く男女比べわらひる見ぬと号てや何んといひ違極快の
 振袖被使く五一た室よりや又何まの玉もや存り登姑く飯
 居此頃久く打籠まく何里り日を或人今宵他家小能借何り
 いけせ五人と勧めける村打籠を我目おく超は月入て休量
 喫茶殆飯湯でいほ存中みお能借あり結る成おり能借
 せよと何度ぞやと答へり殊よ人我とも志まき日思若
 とハ此借れりよ係係一

勾堂

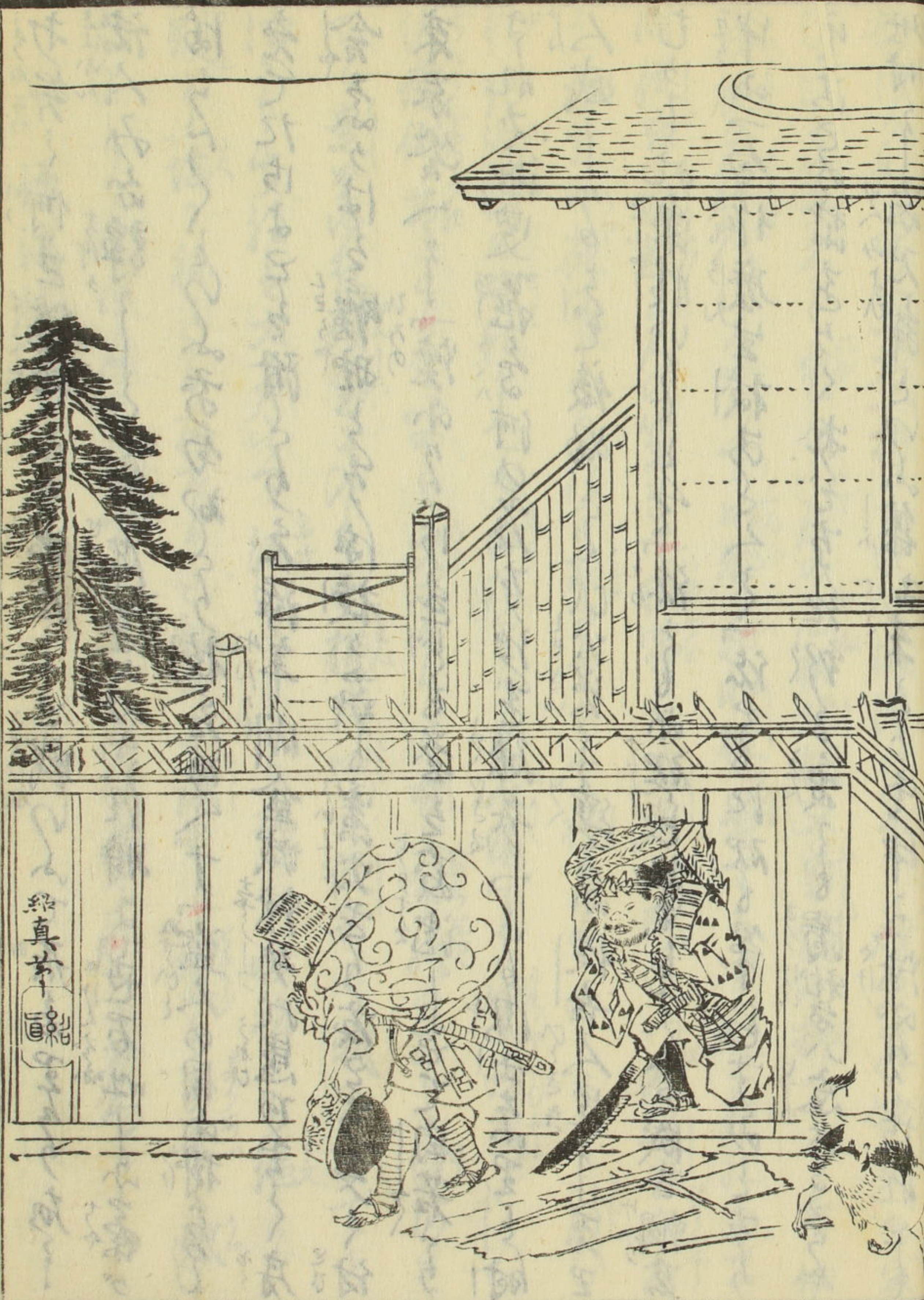
勾堂に加別卯辰山より閑居く柳陰軒と号は常小雅段何り
 て意符成ゆと号ぶあり沙存七生源志を感ドていつとみ
 添く義仲奇ゆと世子此あり兼好此画賛して秋の色糖味嗜
 壺も古く空りりこハ残されぬ此ゆと徳純茶小再我捨人々源志
 此意思を拂お捨く親法籠と月も持帰らまといふ人我

我曆作より夏屋一とて「正月下より此世成をふす」はすき
 びろと又しうらうらとむいゝ息をえたり李東野死ぶるも生
 平生旬已を忘まてゝも志すゝあがそはと感涙を流せたり「福
 つむと又せく失りり秋の村と一白成を向くかこれぬく舞する
 ぞりや

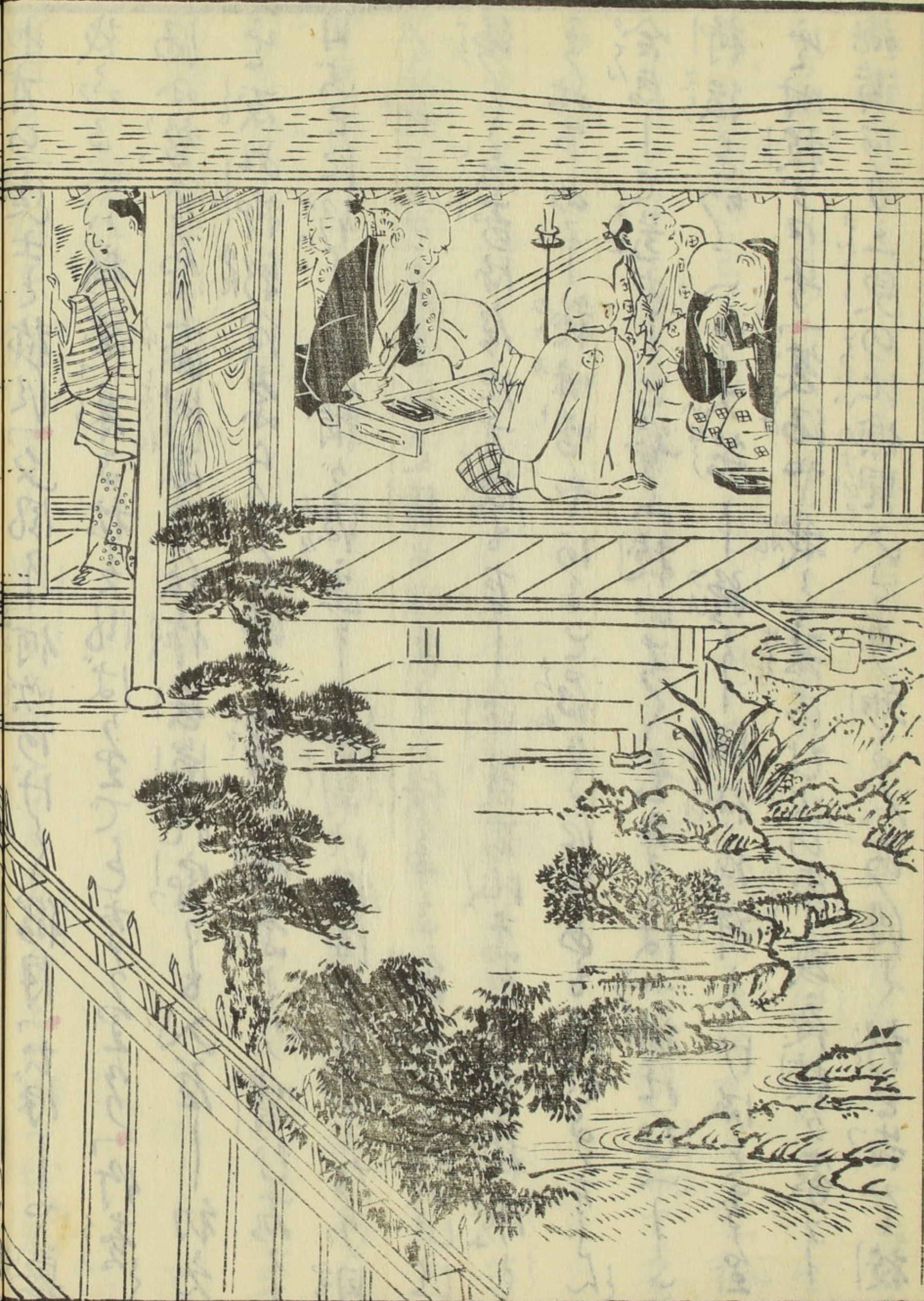
李東之金樽ゆく十村無事といはれ夜を靴むはる「能清此露等
 此高尚の遊ぶ深きるうみ古人も官を俗物をやといらむが如く上
 小を月人のふ風依よりたれつゝ官人令「忘れり遊みそつは
 冠を掛去して「殿そも涙がそきり露の着と言声みゆして出
 ぬ海「心中堅固の船をとりつゝ

磨工北枝

此枝の金樽名磨工「〜」杖臺が牙をり意存その能や成感
 物才の逸士と称は「夕風「何吹けけ〜」月「古厚」や暮
 我ふる「ハ様」来る秋之風はうきでとありり「竹素」
 酒小智やや露時取と此作去嵐此室「も入屋」初免
 生友ぬ柳新成系らぐく酒を鬻く枝素より嗜むあり
 目おとにけ〜「阮籍が壺空」一「蒲匐」此風依を呈「たり目
 く夜くの変ちれた柳もすま「ハ信」多る氣色ちればけは
 後〜云寄は厚記才俊も有「申」復岩比奈をらも枝深く
 ら此下ぬ〜「種味」唱や何とと存るに下ぬも酒れるりた
 合点「て是方」と答ふ枝いそく是方くば一杯はむ〜こ
 柳根を切〜へと大第「一獲」〜酒極成伴「一け」酒とち全
 空肘枝が口号「復酒」や我と兼あむ火の車或夜枝が家〜
 能清何り三更の比偷見入りり知る人あ月く初と告く枝



繪真草



打寄く何生條掃ぬと出度一と戯いふて居ぬ里よりあり
 諸人みお静しく生席を山形さした時よ世百吐ふと條が
 浦ちんくといふお句あさり枝を河へず盗人の目お掛らる
 免でたはよと附くりえ海平間金城控夫此患何とく房
 舎ふくばる暇時とち海枝が家も累火さり友とち多く付
 束系答へる一懐ぬりはさども急を交遣一こて自若り
 された世更飛る河の岸を記を能あつて百風士ふ里と時
 人感一うるとも後始とて比火災く運る小後吾人出り束王
 むり一此案情いふとと法とも小破と等もすみと成る烟
 申ふ一旬作廢生枝あこ人く法ももに破も等とすみとちり
 生よこの案をさうくおどち記新る變も清秘るハ忘はるそや
 此何一家入舞といふ集お来うんそ中よ一陸ぬりはれども
 櫻はりぬち支考一梅が香や海以一裏一煙足存牧童一宮久
 ひはも笠もよく兜れ小屋の屋根北枝又雪清小掛里く奇仙
 杖提の祝儀に系らす水鶴うお水枝一雲中とすれぞ和此案
 時後各一扱裁る人の笠きて杖寄く支考聊或争の人は後者病床
 一在里月夜浦りりたる友を空とと枝をちみもちく付ひ
 一紀湯粥の世法やてもおたさるる鬼角する中疾篤くて
 治療術長とると笑く文おゆりは吉が命終ま里と笑何を
 ちて走王ゆ紀強家よしく生権杖叩き後吾く我を捨てと
 ばりり生法と大声ぬを泣いごりり扱了と此種ち逸とるハ
 別一遠く縁とるおちりて初め小織一舞も奇合く感
 たるとちりやは目を平生此交王思ひ厚くれくちらう一

備浪化

僧浪仕と東つ直一如大僧正の蓮校りて越中井波瑞泉寺
 此位職あり一年慈養此推懐を去てふく或夜をそり
 落材舎ふて堂面一と少才の石堂残波む此よりを其角
 砥波山集りも此志のたてとく名えぬを予と一こは思ひ
 ぬる中我欲すと記せり生一此れ夕残河りめて必廟集と
 分入を累層此声や雄上川一半子の身みもちて時ぬり
 妻侍や松一橋ふ虫の口はえ深十六年壯業一と夜に
 鳴呼ま一いふか

僧千那

伴少千那と江西豊田本福寺の十二世一と法名残波或上人
 とのふ嘗くく山くく浦養材と号は生性軽悟敏達寺一兼門
 此遊禁と稱さく一遊返のくと備るはや初接一替れく此繼
 形や梅柳一守灯籠をるの拘るは柱く家享保八年一寂は七十
 有三業あり

小川破笠

小川平助は江戸の人性多能一とて画と細子小長せり能名宗
 字はじめの諸言は従ひ後意門小遊ふ業若く至一附の句に
 妻ふもと成人わりの小橋特生身杖傷一とく杖接ふ疎まれ亡
 命するもり殺度或附本首れ山中ははよひ入里篇もつ此才
 ちく行跡小倒ま体一衣被まか破昂く取ふと竹れ子笠を
 如ぶ里身一と糸堅一杖杖はとい食小を饒た里りれを食
 形とちられぬ按山子くかと吟して名残破笠と改へるこあり
 空より江戸へ帰く晋子小寄富虚業集は包食子もの句何のくを富
 との奇竹あり時一天和三年あり
 するはと年久一といひき後志家まりて津軽家く百出れ

食端まじり延享は年十餘葉して死するなり

路通

路通と何れ所の人あるはと我知るに若くは一に叔父の何なり
 隠し人なる小神なり一我舊縁近江の路通は傍ら一物
 いひふふ風流の流不及ふ幼少なり好み一掃形すればとて一そ
 此奇我麻衣出て着ぬ豈に去も穢くはて一落とるる流世
 を流の流をばい川も茶れ枯るは一掃形とて曰く我い
 まだ君家一掃形一掃形の季吟の奇形を叩記發時去た
 傍ら一今今ハ儂流のみどく形小遊ぐ生涯は余みとに油我
 小後く東より一と沙才の憐ふくく生より海西の名をバ何と一
 らより一山椒の幸く皮をぐ存せうかい物くと人ふいそれく
 年出當少え流形掃を濼中て出さく一固ふを川や海ま
 此秋此志一遠ふる何とく始く沙才若中流より流れ
 とも幕後馬の流と又生罪を許ける世の舊縁形掃流
 画がみつふ出協所をり流るに或出小義伴奇めて亡沙遊
 俾の時此子大津の使客我流を生席を好くといひ又伴
 丹此鬼要同心一何く奴那曲をせ一と記さるハ大い白
 僕王より一掃形より獵所の曲水く遊す又去ぬ
 路通より大坂小く置俗い多一たるとのり生んは一三
 年以ありより久く来る夏ゆく今又驚く小足ら流て
 別は徳園の言似を成すくいつと平生此人ふての常
 此人が流るる我ち流一何の不審り有るや拙者一
 控くふ画住る満づくの俗よ奈里いても風程の助け
 ちりのいそんハむりの乞食よりハ掃形可中の

二月十八日

曲水榭

楠風尼

伴賀別上野一楠風尼といへる小河風妻が女一て同藩
 友田氏へ嫁するといふ交死して後難髪一能清を以て宗
 之に意門北上子なり空秀派と号え一の名母やうこれ
 後る榭ば一う生瀧若句残携く本禁集と名く世は仍れ
 す惜む屋一刺いあご取口小左く忠たうと望一時衣裾表
 世治ふと交ら魚ううや後年津川の席人使して能清社
 といふ物を猶りうり文彦はを祀置き榭小己制せ一物教あ
 して右の肩以一寸うう望みうり祀振あり東痛子一ううう
 何う安ん置
 生風家あご歎奈一

智月尼 附乙別

智月尼は江戸大津沢若人乙別が母たり親子とも風雅をハ
 出姑んく意得残沙と凡一年乙妙が東行する残送るとて
 「わはとさ人尺小ゆく旅を不ニ北寄嵐茶を憐く一鳴お
 来去回一けり稲すぐぬる香一子え屋す免を協一本を
 れで丁を命惜ぢま極急守此老衰まうとちく一我形もを
 小尺ゆる梳妝くお智月一梅山の香喃を川る香吹うお昼の
 昼する此和ま信冬うお乙妙晩年此尼沙小むり川く紙
 筆残信一帝子の社う祀合せく我一形尺と成屋き物出ま
 残一玉くと金む新臨古うも六十小ちう祀尺小形尺
 を乞まういと力ち一と戯れふがう出て突一とを系まを
 沙の死翹を何らうとめ計里知水ううや浪堂よりその愛

非家奇人談

卷之中

九

我若来りしも今年此よりふりし

經屋松風

經屋松風は江戸村人その身魚家として歸る家裏といふも
 生涯耳龍身の憂何重し一見仙風と書く蕉の小遊ふ雀歩こ
 号す一柳灯此意に注ふ一松字がうぐりこと接神の藪や秋の
 風「葬」や今日くの意此出来し若も又標し一一同い
 子少海深川は腐成むすべしは此奇殊小力を足せり
 とらん一筆箱に送別書句又何となく是吹風も氣あま
 素裳水衣を弾して秋もや冬もあはれや作者もまゝに只
 朽りふるの深なるんといふ里或出は此後出の人支考と
 絶更せ依り一酒すの太なる事延あり較臺の菓刈僅集
 小松風より交考人の文忠何り吾問はハちく
 悪りもよ甚より屋はくはくはくも我と吟ド
 我を慰むばかりふい法子はたて終り一歳年此中に
 進む北白紙清中ゆく有屋皇の収其お病着わりの
 一故れす縁と連者ふたゆる復の中
 聖堂條十八年八十條案りして死せり

野坡

周家野坡を越れあ妙の人ほじめ江戸は遊び後浪急に位
 す標本社と号は蕉つ書流小附合の神我候とる此人と
 越人子親し依者ちりこふ書教向あこ妙あり子規解
 此出まぬ橋子くあ長松が秋の名で東流はまう系一はき掃
 際してく山茶寂小りり一ははの垣高ゆひ名や神去ぐ凡
 或夜道そのあよ悪入りり坡お書して云く我一抽の行

ふー唯葉一竹こつめ一並りゆ敷はむけれが柴抄禁く
 んのく 意種すんーと塗るふつ能なる多被世くち海つ
 松よすー茶席此名は我直れおとと踏出ー我席の極
 巨竈ー腰王先と何るまを足つ事何のらるうやと官小坡
 尔く此ゆー答ふ左何るが今日あの存極も句作ち海く
 死やと坡すふりちー垣潜る雀ちらふく香北流と塗たー
 感してお伊知けりし生人と成り我意るる此の如ーを
 後先沙の望名席を言津世小極ー句ら言津世の存と
 祐せりし生年壽我まふに

紙智哉人

紙智哉人々尾陽後味位す舊つもの老牙をり一尺海目ハ名りん
 い屋一たりはみ一棟名本の斗ます此らる若禁ふ一茶ちらる
 抽替らるる牡丹うみ一稗の穂れるあーたる衆色る衆一集
 江戸ぬく生句が句見才といひ出我著一て我人ガ送別
 此句一と我と此の公屋すはよ後葉集此意といつるに一我財
 は風も我まにけーの花とぬーく此人の涙中々ぬバは心
 沙着も是を靴さる海玄ー江沙の流極は性一信る物
 何るー小何ーの髪を此志と覚るうりーや若此女おごお入
 ちーるりも有ー我着る此終里何らげるる我憐く後の此
 柳ゆき生言りよ家玉の尺何とよふ久味を成好ー我後徳て
 一着海一思ひ切る時猫此意こまかおちりり沙と此惻懐を和
 よみーけん後の櫻集よ此句我が加入何るーとと色と君子の
 懐む取ちれご又此危るー盛ち此もうと海ーはまを此愛
 瑞霞叩く生極を知れよまを是を此人の風流ちるるらーや

病双して後善徳の支考先妙の愛悲滑稽自れ傳ふごとく妄言
を撰人牛化松撰り去多くおして古武を塵一世人を欺ける
とて大了怒王不猫控とのみ虫を着しく洋行して生報を弄
せり實に我及に深切ある清潔の士とて世間のるべきもの

涼菴

涼菴と號す河山田小在恒しく林雀あり蕉の松を乙由
と名成等々良意友叙何るひの神風録と号す其れも意を
己意をり今留れり淋げげく何れおろや松名意松を
織一雅一あり松有り後一松あり松あり此句老成を徳
大歩北手小何候りたる量くお身のよ成只去存水りりぬ松意
をて世室り邊紀を人たと候神一子履を能くおて候ら
候人まうと存候へむるに尺何とらず菴をを和の意より
直了思きく流北東山一ゆ紀室より松海源十古の松意
しく又うりくと終小長流海でたより好一とち堂室
我我名雅人と稱す一老後危等おたせんがう人松上
に去す里辞き成乞ふ菴眼を并記して念息をや室何ら
き北子祝と云つて又操く一と曉の室を候居りやと再
操の意吹ゆ乙由りこつ小存く此節又流ぐ何れとてかひ
や何らん室候北松字と言語又峰り里け逢が首水寺成候
流せる時候き小息を絶た里りり一出り世り我能く
痛症を患く死せりり病中の吟今候で八人が居むごと
かりひ一我身好う人おかくの仕合と室候法なるを去る
以てつ流又候

曾良

非家奇人談

卷之中

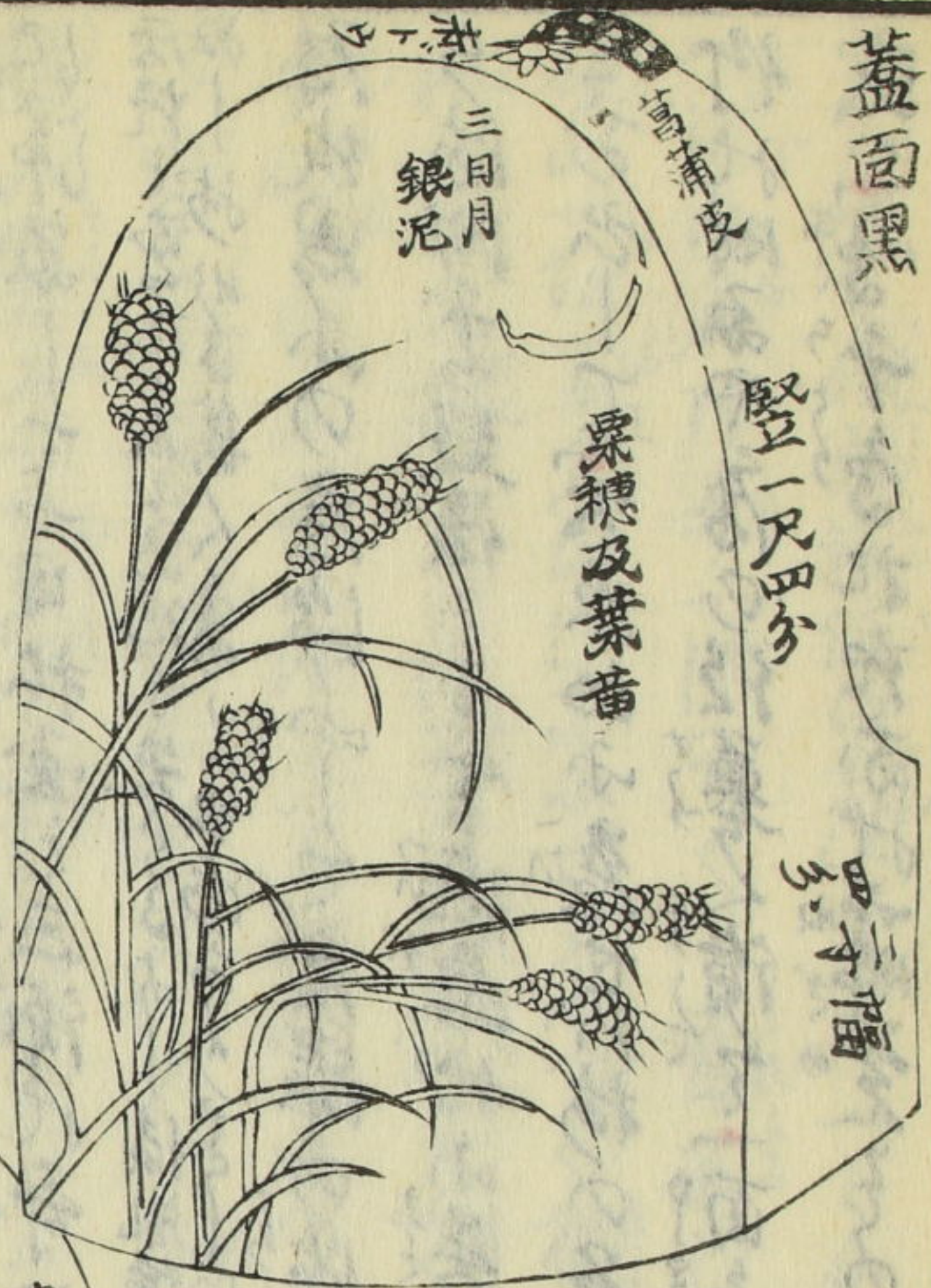
三十一

別良之伝所後傳の聲なり一とせ東武又遊ぐ意つ又入里
 一財小名何り一ぼのくと鳥居むや密北妻果多や昭離れ
 孫山一垣百尺のはあふちふつく根亮ふふ水及尺及と河急の
 市北はま按ずるに美の細道又別良之後成屋みく伴張團
 長崎といふ所小ゆり里阿れは先づめて初と存く一河紀、て
 たふ建休とも新宮堂又いとけきとの然み孫るくら
 眼み雙友急のあて雲又海すふが如くは河河急が河本の
 難情思ひ海成屋一積る成或之此人北越の山中又て河急
 系小遠引列れらとといふ大ある誤なり若縁集
 海城ふての吟も一たがみ休て紅一ぼは汗拭と是等も一と
 之北志の程をよは

原田守古

原田氏能名守古和別郡山北重居なり少小なり縁懐人今
 起り少小博東歌書古人扱はあひに通るる或時人く
 打家里梅の野のどて扱句せよと少小材の云く少小進
 少く一先ぐけの急の手扱や高松梅をく先才磨は後トて
 後髪トて意つ小入取京中少小存者少小抱つる時その言
 に清美して一日松玉と三海北奇仙阿り
 後髪と云ふ一在その絶も失くするより後亂種急の
 ぬ一少小集人集く去流ありをいふ系は水が少小の初を厚く
 厚成思ふの志流やして元録の法道又意つ船借れ少小南と称
 ら海少小後後も手遊慕他小吳たり少小の第位をかりて
 こそあきて一太系小急せは梅の急げり里津川へ居く一少小
 竹北財取や急の流慕く清令一而急急はひく梅北系取く急
 或の鳴千急れ起北急急急その後一むり一教く少小

蓋面黒



一尺四寸

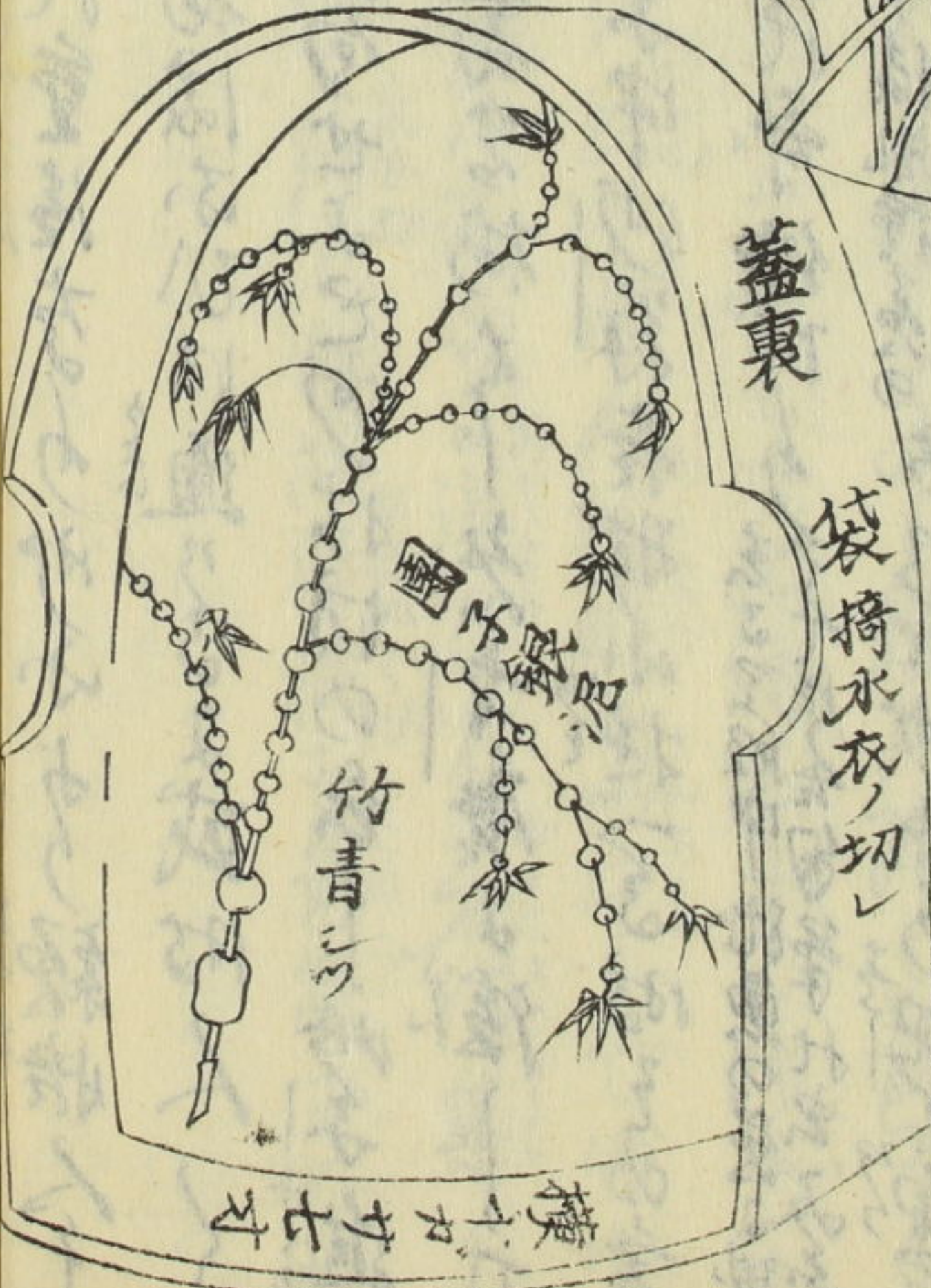
粟穂及葉苗

三月月 銀泥

頭陀箱付
貞享年間意翁蹈首
出之屋道過
郡山而止於字古家十

蓋裏

袋掛水衣切

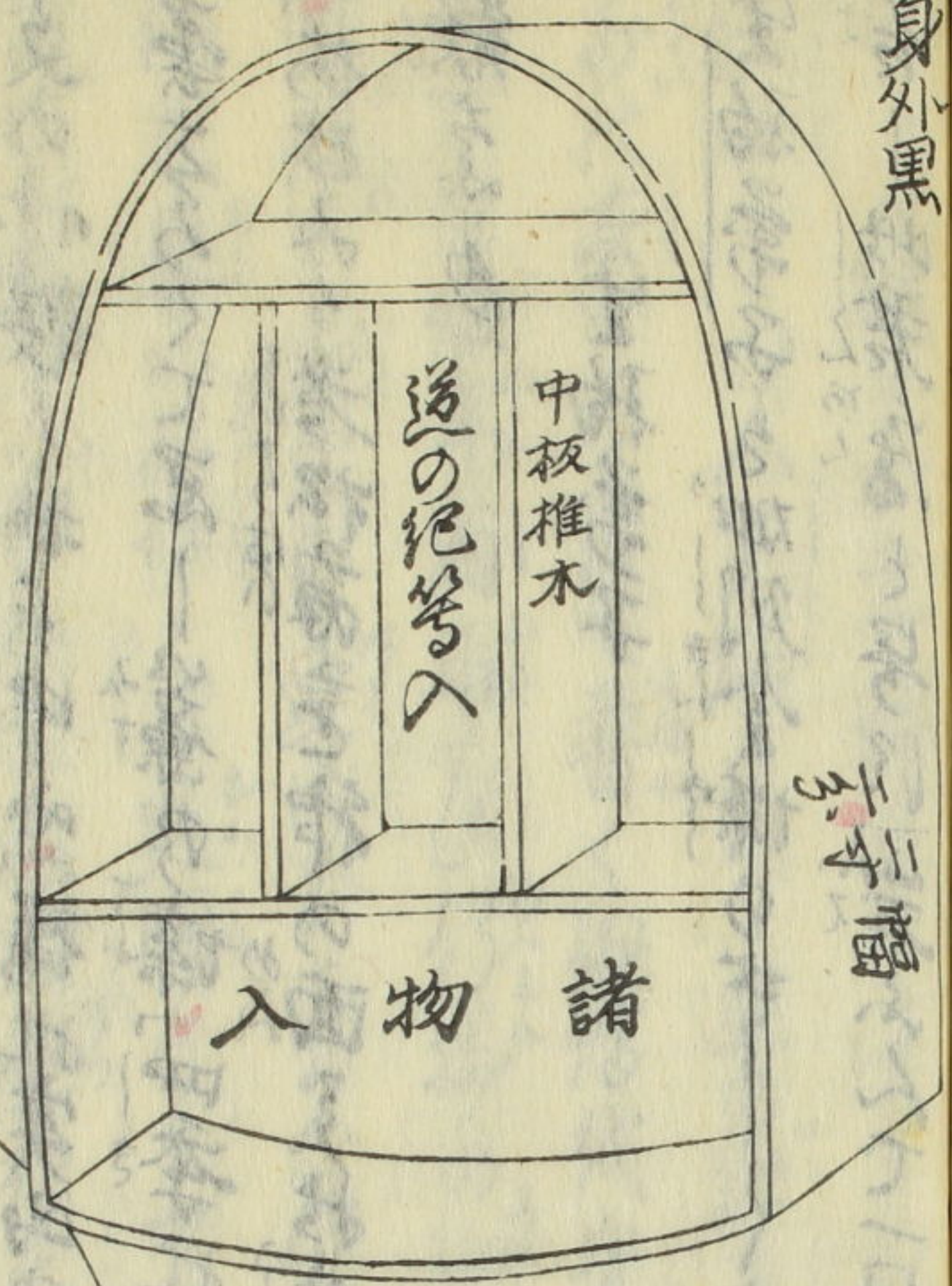


竹青

無下寸上寸

件日与弟子松國有云
泳之能滑于時
翁賤別錄此一物既既字
右深秘石室云

身外黒



中板椎木

送の紀等入

諸物入

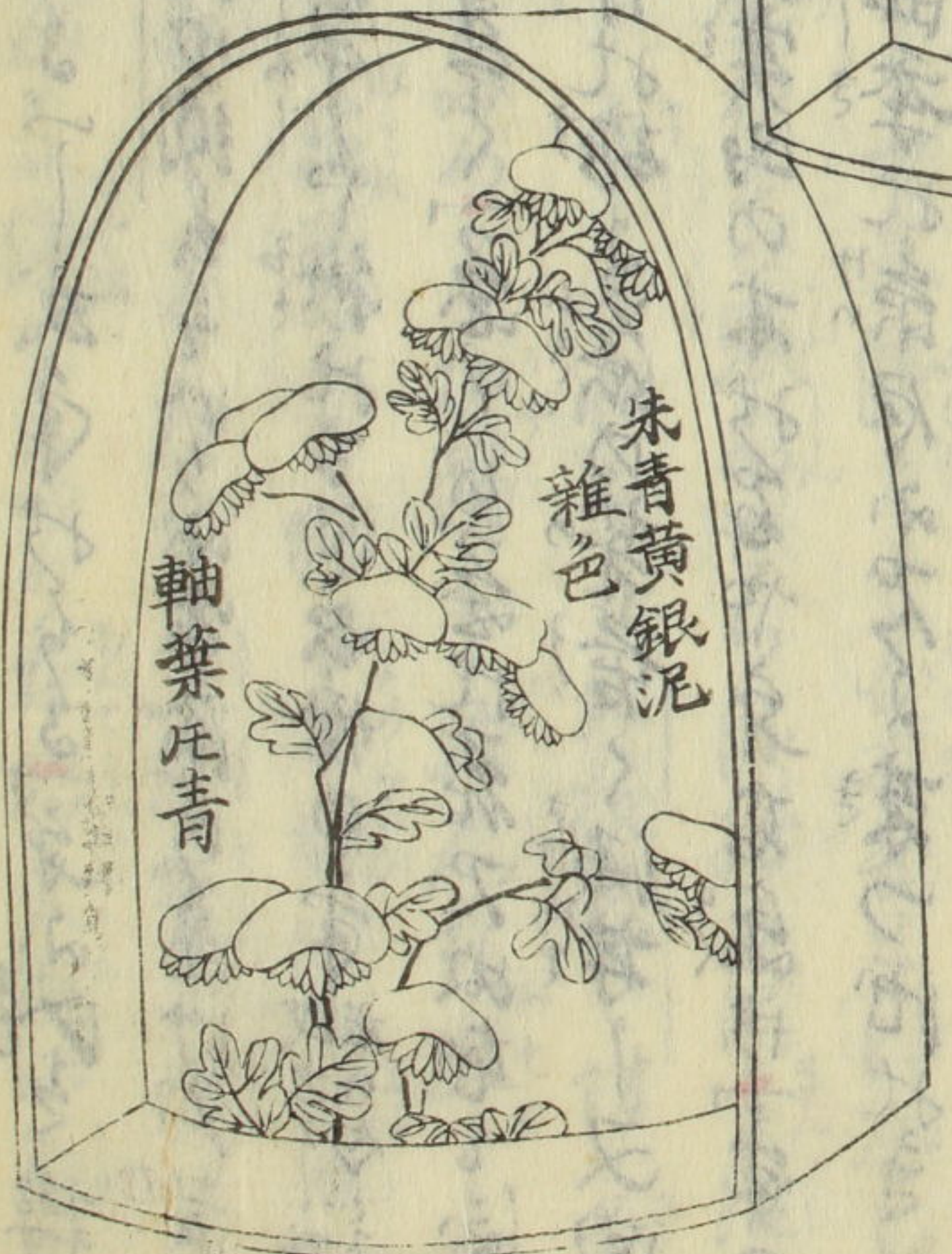
二寸

後有故遂為
正正處士有僕嘗行
而得摸之跡
火止紅兵色為附屬

怪控者亦同

焉今依其家他以減生
借來正尔

儀伴采人



朱青黄銀泥 雜色

軸葉氏青

治禁うふ生別情おのひけるごとく武運おつらふ身ふひも梅
 片久日の意仏うふふ又武時清少納言といふ小僧はあけけん昔
 ちつちと死ねたおとあつて申千や梅おをとお母の事
 此のハ一句一五花をとおほまうくつぎくのそお花又ぬおも
 神儒仏の三教成とおれつくすお確又の茶着くお母又一回
 又の什敷一梅お申お梅お実山の本おるや身お楽お
 要おて思一葉おの藤四季お奈月お万ふ茶つおれきし
 梅おみろ考お梅おを神の面おは造作お申おるる大腕おの
 類おふり

生駒父子

生駒父子とお別々
 若し此君唐と号に岩ふんで一日くの梅お香程又三日月
 加ふる梅おお元瑞の法はじめて梅お面一と回くお
 徳正了のん克満一と道の能直度足ぬ屋一我今あり才
 おれ衣とおつて普く能僧お守護す人と盟約せしと
 奈より後年翁再おひお梅の砌り金楼一と家れ一と此
 更後一と皇を達けるを久屋お獨里得馬お策何てを
 能我慕いお任おと追附おりるの候とてお衣おと月金三
 高油おすの解とお志君厚おを感おせらお梅に金銀
 監戒意の嫌方りお二神一申されぬ又此枝秋お付急
 迫を救い武と風流此主とおあつく加陽一強人我遊一む
 右小進二村も世人家友と恐あ王と妙子抱狂おお記せり
 甚り一菊子我意つ十控おおしく及を支持書又信つる
 とはよりおえつるお大いおる保里おありお文淫おおの

友一子素裳何れと載ぬ

知足一家

知足を歩物言法其人慈翁と交り深し其居我叔照彦
 垣廩亭と号す一志意く風流あり或百姓の二男三男を
 くみ仕立しる後居小中若しる句之落葉之河梁報く一志
 寂居ふ又く風や吟詠吟く素法一知足の子父此志我
 継ぐ千を掛を著は一睡ちく一夜く一夜忘忘一蝶羽松
 根小多代我何居る時素ふ知足母里加よひいころあや
 伴隣母事一志素一覺つこれ序雲より蝶羽女素子

山口素裳

山口氏之江戸の人為不和漢此出を嗜く詩文を吾に若母
 仕く至孝あり人何多むを事を通んる成すくむるを固禱
 して屋みぬ是秋のふも遠んる成忍れいなり等実の君子
 軟祿すく一弱冠より季吟書つ又遊く能道此達者とい
 づる唐此名を今日といひ又來書とも素裳といふもその
 別号あり後或主家成禱してあり深川の別荘に遊
 浪城海に交友を集く晋北惠達り道社に撤せしあり能
 翁一若ら社中と稱するの号此等又依てなま句らそ社よ
 類すは句池小精赤一飯名く祀習ふ柳り友を作み赤言為
 采種一年とちや軍ちぐれつは後河一旨す祀ぬゆや月名
 十三夜一孫多樹こは岐と家や鈴鼓舞人ほ小捨灸せし
 目にい書禁山ほとくぎに初は月何豪壯あくと可見享保二
 年八月七十五歳一丁没せり或人慈翁は能道坊のい
 んと号ふ唯死せりと答られしとちのりはまは翁と此叟此

